シューマッハは，そもそも，農業生産における人間と自然の関係は，最大利益を求めて世界を移動する自由をもつ企業とは根本的に異なるとして，農業の国際分業論を批判し，農業の目的を次の三つに整理している。①人間と生きた自然との結びつきを保つこと。人間は自然界のごく脆い一部である。②人間を取り巻く生存環境に人間味を与え，これを気高いものにすること。③まっとうな生活を営むのに必要な食糧や原料を自らつくり出すこと，の３点である。農業の工業化の方向は農業の目的を三つ目の食料生産だけに限定していて，一つ目，二つ目を無視している。

また，末原（2004）は，同様に文化としての農業から深く考えることが大事であり，①人々の生き方や価値観についての視点，②家や家族とはどうあったらいいのかという視点，③人間の体を形成する食料を安全で確実に生産する方法の視点，④食文化と農業を結びつける視点，⑤地域社会と自然と人々の生活の結びつきの視点，⑥こうした地域社会と人間の結びつきは日本だけでなく，世界中で同じことが起こっており，それは我々の社会と無関係ではなく直接関係しているという視点が必要である。さらに，現在の市場経済第一主義の社会にさまざまな行き詰まりが見え始めており，あらたな価値観を構築して社会を変革していく必要性がある。すなわち，工業製品でも，安ければ良いものではなく適正な価格があることや再生産できる価格の保証が必要であり，環境負荷の低減によってもたらされる利益は国民に還元されるものとして，その負担に理解をすすめる活動などが必要である。

本稿は「自然農法」に掲載されたものを一部加除修正して寄稿したものである。

参考文献

小野武夫編著 1934.「会津農書」．伊藤書店，東京．

川島博之 2010.「食の歴史と日本人」．東洋経済新報社，東京．

加用信文 1996.「農法史序説」．御茶ノ水書房，東京．

佐合隆一 2017. 自然農法，76.4–11

佐藤洋一郎 1999.「森と田んぼの危機」．朝日新聞社，東京．

末原達郎 2004.「人間にとって農業とは何か」．世界思想社，東京．

筑波常治 1987.「日本の農書」．中公新書，東京．

富山和子 1993.「日本の米」．中公新書，東京．

「日本農書全集」15 巻（1977），30 巻（1982），34 巻（1983），農文協．

田畑の草種（くさぐさ）

芹・競り・迫り・seri・白根草（セリ）

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地　須藤　健一

セリ科セリ属の多年生草本。在来のセリ属は本種のみ。水田，溝，小川，湿地など，土壌水分の多いところに生える湿地性植物。高さ20cm～50cm，2回3出複葉で，株際から多数の走出枝を出し，広がる。

「芹 薺 御形 繁縷 仏の座 菘 蘿蔔」と，昔から春の七種の筆頭に挙げられる。わが国で在来野草から栽培植物となった数少ない植物の一つで，ほとんど改良の手が加わっていない貴重な「野菜」である。万葉人たちはこの野菜を求めて，冬枯れの野に出でて，若菜としての芹を摘んでいたことであろう。

万葉集に芹を詠んだ歌が２首。葛城王（かつらぎのおおきみ）が薩妙観命婦（さつのめうかんみょうぶ）へ芹のつとに副えて贈った歌。

「あかねさす　昼は田賜（たた）びて　ぬばたまの
夜のいとまに　摘める芹　これ」（巻 20）

葛城王は，当時 45 歳。山城の国へ班田使として赴いていた。彼は都にいる女官に，昼間は役所の仕事で大変忙しかったのだけれど，それでも夜に何とか暇を見つけてやっと摘んできた芹だよ，これは！　と，自ら摘んだ芹に副えて歌を贈った。自分より位の低い女官に，そんなにして摘んだ芹だよ，大事に使いなさい，という何とも偉がった歌であるが，その歌に宮廷女官薩妙観命婦は，

「ますらをと　思えるものを　太刀佩（は）きて　可爾波（かには）の
田居（たい）に　芹ぞ摘みける」（巻 20）

と応える。

貴方様は大変偉い男らしいお方だと思っておりましたのになんとまぁ，立派な刀を腰に差したまま蟹のように地面を這って可爾波の田に入って芹を摘んで下さったのですか。それはそれはどうもごくろうさまです。

芹などの若菜を摘むのは女性の仕事なのに，男のあなたが這いつくばって摘んだのですかと，なんとも虚仮にしたような，微笑ましいような掛け合いである。位は低くとも男に靡かない，凛とした女官だったのであろう。

表題の「seri」はアイヌ語をラテン文字表記したもの。